

まじふび

Vol. 16 No. 3

2019. 11. 3

「教会の生命線・地区消息活動と祈り会」

主任牧師 中島 聡

「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」

コリントの信徒への手紙一 一二・二六〜二七

教会の教会たるは、主日(日曜)礼拝と祈禱会にかかっています。「イエス・キリストは十字架に架けられたが三日目の日曜の朝に復活された!キリストは我が救い主!」と信じ礼拝を捧げる、救い主から永遠の命の恵みと祝福を受ける、これが教会・教会員の根幹です。この恵みと祝福を受け取つて、はじめて教会・教会員は息つき、様々な伝道活動を担っていくことができるのです。

使徒パウロは、このような教会の在り方を体に例えて説明しています。第一に「教会はキリストの体」(コロサイ一・二四)であり、「キリストが教会の頭」(エフェソ五・二三)であるということ。第二

に「わたしたちは、キリストの体の一部」(1コリント六・一五)であるということです。キリストは自らの恵みと祝福を私たちに与えるために、「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれ」ました(ヨハネ一三・一)。そして、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」(ヨハネ一五・五)とあるとおり、私たちはキリストに繋がり、キリストの愛に満たされて、永遠の命の福音を宣べ伝えていくことができるのです。

しかしながら、キリストに繋がり、キリストの愛に満たされ、恵みと祝福を受ける礼拝と祈禱会を皆が守ることができるといふと、緊急の用事や病、看病介護、その他様々な事情で守れない時がありますし、それが長期化する場合もあります。そんな時、各々の場所で祈りを捧げることになりませんが、そのような方々を覚えて、主による病の癒し、慰めと励まし、主の平安を執り成す祈りが捧げられ、教会・教会員の根幹である礼拝の恵みと祝福がすべての人に行き渡るようにしていく必要があります。互いを心にかけていたわり祈っている内容、キリストによつて与えられた恵みと祝福の実りを、便りや電話、訪問によつて具体的に知らせてあげ、「霊の糧」、「霊の栄養」を届けていく必要があります。

人の体も一〇万km地球二・五周分)にも及ぶ動静脈、毛細血管がすみずみまで張りめぐらされ、酸素、栄養素を送り届けられて保たれているように、教会も心臓部であるキリスト、主日礼拝の恵みが教会員にすみずみに行き届くようにしなければ保たれないし、まして成長することなど不可能なのです。この教会のあたたかい血流が地区消息の活動、祈り会であると強く示されます。地区のメンバーを覚えて祈り合い、また時には集会を開いて、主の恵みを証するのです。また、血管は必要なものを届けると同時に、二酸化炭素や老廃物を運び出して健康を維持しているように、様々な不安や悩み、時には「ぼれ話のようなものに耳を傾けることも大切なことと思わされます。」

これらのことは途切れなく行われることが大切であつて、もちろん、役員会、壮年会、婦人会、子どもの教会、ろばの会、カルポスの会、教会聖歌隊、KGC M 清水ヶ丘、ベタニア村、サマリヤ会、各家庭集会等々すべての教会の集会、活動においても行われるべきことですが、地区消息は「キリストの体である教会員」の健康を保ち、さらに成長させていくことに特化したまさに教会の生命線なのです。地区活動から祈り会、家庭集会、訪問聖餐式が行われ、また教会として聖餐礼拝が持たれるようになったことは大いなる恵みです。

「わたしはあなたのために、信仰が無くならない

ように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ二二・三二)。私たちは皆、キリストの愛と祈りによって守られ、支えられてきました。また誰かが私のために祈ってくれたので教会に繋がることのできたのです。巻頭聖句「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」(一コリント一・二・二六〜二七)のとおり、悲しみ喜びを共にし、互いに祈り合ってキリストの体なる愛に溢れた教会を建てあげて参りましょう。



牧師

片平貴宣

「パパの話」

突然ですが、皆さんは「父」、「お父さん」あるいは「パパ」と呼ばれたことはあるでしょうか？呼ばれたことがある、と言う方もいるでしょうし、まだ呼ばれたことがないという方もいるでしょう。そしてそもそも呼ばれるはずがない、という場合もあると思います。

私たちが「父」と呼ばれるためにはいくつか条件があります。まず一つは「男性であること」、そしてもう一つは「子どもがいること」でしょう。それに照らし合わせると僕の場合、呼ばれる可能性はあるけれども、まだ呼ばれる立場ではない、ということになります。

けれども不思議なことに、幼稚園のある子どもがなぜか僕のことを「パパ」と呼び、ある女性の先生を「ママ」と呼んでいた時期がありました。今ではその子は僕のこととはちゃんと「トニー先生」(が、ちゃんとした呼び方はさておき)と呼んでくれます。

僕はその子に「パパ」と呼ばれるたびに、腑に落ちないというか、ふしぎな気持ちになったものです。呼ばれると一瞬、「いや僕はパパじゃないんだけどな。あなたが、パパと呼ぶべき人は別でしょう？」と言いたくなる気持ちがありました。

けれどもそんな気持ちを抑えつつ、「パパ」と呼ばれるたびに「はい」と応えていましたが、その子がそう呼ぶならそれも仕方ない、まあ良いだろうと

思っていました。でももしもその子が僕のことを「ママ」と呼ぶようならば、それは否定しないといけない、と思っていました(幸いなこと?)にそう呼ばれることはありませんでした。

そんな幼稚園でのふしぎな体験でしたが、しかし実際は私たちクリスチャンも同じことをしているんだ、と思われました。それは天の神様を「父」と呼んでいるからです。もちろん、造り主なる神様は私たちと全くの赤の他人ということはありませんし、「父なる神さま」と呼ぶからとて神さまが男性であるというわけでもありません。それでも、血縁上の父親ではない方を「父」と呼んでいることは確かです。

そうなりますと、神さまの気持ちはどうでしょうか？もしかして「お前に父と呼ばれる筋合いはない」と思うところもあるのかもしれませんが、本来、神さまを父と呼べるのは、その子であるイエス様のみです。アブラハムやモーセなど旧約時代の信仰の偉人ですら、神さまを「父」とは呼んでいないのです。

しかし、イエス様はこう言われました。「**神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。**」(マルコ三・三五)あなた方を友と呼ぶ、あなた方を兄弟、姉妹とする、とイエス様が認めてくださったのです。父なる神さまの独り子であるお方が、私たちを兄弟姉妹としてくださったので、私たちも神さまを父と呼べるのです。言うなれば、イエス様が長男で、私たちがそこに連なる弟であり妹です。

そしてイエス様は天の父なる神さまを「**アッパ**」(マルコ一四・三六)と呼ばれました。これは父なる神さまへの本当に親しい呼びかけ、それこそ私たちが

言うところの「パパ」という言葉に当たると言われます。

本来なら、天地万物の造り主なる偉大な神さまを「パパ」と呼ぶのは恐れ多いことです。被造物の一つに過ぎない私たちが、造り主なるお方と親子関係にあるということすら驚くべき事です。でも父なる神さまの方から主イエスを遣わしてくださいと「それでよい。あなたがたはわたしの子どもだ」と認めてくださったのです。

ガラテヤの信徒への手紙 第四章六〜七節にはこうあります。「あなたがたが子であることは、神が、「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださいました事実から分かります。ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。」

私たちは罪の奴隷ではなく、神さまの子どもとされました。神さまを信じ入れることで身分が変わったのです。そしてさらに、「相続人」と言われています。神さまの財産を受け継ぐものとして認められています。天における最高の身分を約束されたものとして、日々感謝の内に歩みを進めたいと願います。



動画はこちら↑

